

◆生産者会議

H20年度魚類・介類養殖生産者会議

水産業改良普及センター本部駐在 平安名 盛正

平成21年3月18日(水)沖縄市産業交流センターにおいてH20年度魚類・介類養殖生産者会議が開催された。例年北部名護市において開催してきたが、今回から介類との合同開催に伴い、全県からの出席が予想されたため、沖縄市での開催とした。

講師には、八重山支庁農林整備課 漁港水産班 主幹 鹿熊 信一郎氏から「世界のナマコ漁業の実態と沖縄での持続的利用」と題して講演頂いた。また、水産海洋研究センター主任研究員 中村 博幸氏から「沖縄県のハタ養殖について」、知名 真智子研究員から「ヤイトハタで確認されたやせ病(腸管粘液胞子虫症)の2つの研究報告が行われた。

連絡事項としては、栽培漁業センター主幹 金城 清昭氏より平成21年度魚類種苗生産及び配付について情報の提供があった。

全体討議については、これまで事前の案内文と一緒に出欠連絡票において関係機関への養殖に関連する要望を普及センターが取りまとめ、会議場においてその要望について関係機関が回答するという形で進めてきた。しかし、実際の会議においては要望内容に答える権限や組織内部での協議もないまま一担当者が回答することは困難であるとの指摘があった。このため、今回から趣向を変えて生産現場での疑問や困っていることに関して出席者全体で解決していこうというフリートーキング方式で進めた。また、事前に回収した要望については普及センターで取りまとめ、関連機関へ要望内容を送付し、回答を求める。返された回答は、要望提出者にきちんと返答する方式に改めることとした。

鹿熊主幹講演の「世界のナマコ漁業の実態と沖縄での持続的利用」については、昨年末か

らの金融不況に伴い、値崩れ状況であったが、現在は次第に持ち直している。ピーク時には最高級品の北海道産マナマコで乾燥品でキロ10万円の値が付いた。乾燥すると重量で1/20になるので、生換算でキロ5千円である。沖縄にはマナマコは棲息しないが、シカクナマコが乾燥するとマナマコによく似ており、沖縄ではシカクナマコを加工した実績がある。しかし、需要の増加に伴い、懸念されることが資源の管理である。太平洋の島々や東南アジアでもマナコ資源の乱獲が行われている。マナコの場合、動きがほとんどないため、採捕が容易ですぐ乱獲につながり、きちんとした資源管理の下で採捕量や採捕時期・海域の指定等のルールを設けそれを遵守しなければ、マナコ資源はあっという間に枯渇することは容易に想像がつく。八重山においては漁協青年部を中心に、現在マナコの加工試験を実施しているが、来年度はシカクナマコの資源調査を青年部中心に取り組む予定である。そのあとは、名古屋市立大学赤嶺准教授の講演資料と八重山漁協青年部の加工試験を紹介。

次に水産海洋研究センター主任研究員 中村氏より「沖縄県のハタ養殖について」発表し、沖縄県のハタ養殖は種苗生産体制が整い、ヤイトハタを中心に先進地的な位置にある。平成19年度に過去最高の養殖生産量で75tを記録し、生産額は8千万円。今後の生産量は増加するものと予想している。さらにイリドウィルス病の予防策としてイリド不活性ワクチンの使用が認められ、今後の安定生産に寄与するものと考えている。イリドウィルス有効試験ではワクチンを接種したグループの斃死率は0%であったのに対し、対象グループでは60%に上った。

また新規養殖対象種として期待されるチャイロマルハタやタマカイの研究も進められており、今後の発展が期待される。

しかし、チャイロマルハタの場合、試験養殖において脊椎骨の屈曲した個体の問題がある。今後の課題として、1，イリドワクチンの利用がある。これは、安定生産、安定供給体制構築にはワクチン利用が望ましい、また、ヤイトハタだけでなく、マダイへのワクチン普及の必要性もある。2，生産物の統一。餌止めが不十分、メめ方、血抜き状態にばらつきがあるという指摘が聞かれる。3，県内需要拡大を目指す。これらの課題解決に向けて、県関係者だけでなく、生産者も一丸となって頑張ってもらいたい。

続いて、知名 真智子研究員から「ヤイトハタで確認されたやせ病（腸管粘液胞子虫症）」の研究報告が行われた。魚のやせる原因には、質の悪い餌やハダムシ、ストレス等がある。やせ病とは、魚の腸に寄生するエンテロミイクサム・レーイという寄生虫が原因で魚がやせてしまう病気である。外観では、頭骨が浮き出るほどの状態で、頬もコケる。内臓は緑肝や腸が透けるほどに薄くなる。魚病のフンや内臓を食べることで、健康な魚にも感染する。発生時期は、

水温が20～25℃で秋から冬または冬から春の時期に多い。潜伏期間が長く、感染したことに気付かず、蔓延することもある。健康魚が感染すると2週間から数ヶ月でやせた状態となる。また、この病気は、陸上の養殖施設でのみ発症する病気ではなく、天然の魚（クマノミ・マダイ・トラフグ・イシガキダイ等20種類以上で感染が確認されている。現在、やせ病に効く有効な薬や治療法はないことから、魚病を見つけたら、すみやかに取り除き、陸上処分を行うしかない。様子がおかしいと思ったら、担当普及員へ連絡しましょう。

講演、研究報告後は栽培漁業センター金城主幹より21年度の種苗配付と予定時期について情報の提供があった。

全体討議においては、生産者からの現場における養殖技術・餌等での質問や介類における販路に関する情報交換を期待していたが、県関係者間での質疑応答に留まり、生産者や漁協関係者からの話はなかった。今後も生産者会議を年1回の情報交換の場としての有効活用することが重要である。

